
小学生の憂鬱。

ma.na

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小学生の憂鬱。

【Nコード】

N1879G

【作者名】

ma.na

【あらすじ】

哀ちゃん小学校6年生。小学生には欠かせない家庭訪問。でも新一とふたり暮らし。なんで家庭訪問なんてものが・・・哀の溜息は止まらない■カップリング新哀です。正統派以外ダメ！って人はバックお願いします

第一章：同棲してます

「このプリント・・・見せなきゃダメかしら・・・」

工藤家のリビングでランドセルを降ろした哀は溜息を吐いた

昨年まではよかった。博士がいたのだから。でも博士がいなくなっ
た今

「家庭訪問・・・。必要だわ。」

そう、小学生には避けて通れない『行事』がたくさんある。
学芸会も、運動会も、保護者の意思で来るものだし、なんとか知ら
せずに済む。

まあ新一は呼んでいないのに『俺の探偵能力をナメるな』などと言
って帝丹小学校の行事には必ず顔を出していたのだが。

そういった姿を（しかも満面の笑みで）見られるのは非常に腹立た
しかったが、戻ろうと思えば戻れる身体をこのままにしているのは

自分自身だ。

ある程度は仕方ないと我慢していた。

行事で学校に来られる分にはまだいいのだ。

クラスメイト達にも『兄』だの『親戚』だの適当なことを言っておけばいい。

ただ、家庭訪問となると・・・

ご家庭での様子はいかがですか？

はい、俺にとっても尽くしてくれます

・・・・・・考えただけでゾツとする。

大体どういう関係だと答えるんだろうか。

新一は哀との見た目の年齢差など全く気にしていない。

平気で恋人です、同棲してます、なんて言いかねない。
大学生が小学生と付き合ってます、同棲してます・・・・・・犯罪
よ・・・。

考えれば考えるほど頭が痛くなる。

「長期の調査依頼でも入らないかしら・・・」

そう、しばらく新一が家をあげてくれればいいのだ。
そうすれば……

ダメだわ。そんなことしても学校から『いつなら都合がいいでしょうか？』なんて連絡が入ってしまう。

5年生までならまだいい。

6年生になると私立受験はするのかしないのか学区通りの中学校に行くのか

そんなことを話さなければならぬらしい。

担任は『必ず全員のお宅に伺います』などと妙に律儀なことを言っていた。

受験もしない。校区通りに通う。それだけのことを哀から伝えるだけではダメだろうかと一応聞いてみたが『例外はない』らしい。

「避けて通るのは無理なのかしら……」

ふうつとまた深い溜息を吐いた時後からひょいとプリントを取り上げられた。

「へえ、家庭訪問……俺はもうほとんど授業ないしいつでもいいぜ。」

「新一！？貴方帰ってたの!？」

策を巡らせるまでもなかった。

こういう日に限って帰りが早いんだから……。

「今日は警察に行ってたんじゃなかったの？」

なんとか話を逸らそうとする、が。

一度目にしてしまったものを新一から忘れさせるなど不可能だ。

「で？お前はどうかしたら家に担任を呼ばなくていいか考えてた、
ってわけか」

ご名答。さすが名探偵ね。

「だって……貴方なんて言うつもり？まさか『恋人です。同棲
してます。』なんて言わないでしょうね？」

「でもその通りだし？」

新一は二力つと笑みを浮かべる。

「信じられない……通報されるわよ？」

「警察俺の味方だし？」

「……そりゃそうかもしれないけど……」

あなたの出入りしてる一課じゃないわよ、通報先は。

「冗談だよ。」

「貴方が言っと冗談に聞こえないのよ……」

「ま、俺は恥じることにしてないし言ってもいいけどな」

．．．．．これだから．．．．．

「ま、最終日にしといてもらって。準備もあるし。」

準備ってなんなのよ．．．まったく。

仕方なく言われたとおり最終日にまるをつけて提出した。

第二章：救世主

「明日ね．．．．」

哀はカレンダーを見て今週に入ってから何度目かわからない溜息を吐いた。

新一の字ででかでかと

家庭訪問！！

と書いてある。まったく何の嫌がらせなのかしら．．．

何を話すつもりなのか、いくら問い詰めても話そうとしないし。

「何か企んでる顔なのよね．．．．」ふうっとまた溜息を吐く。

「おい、溜息ついてつと幸せ逃げんだぞ」

．．．．誰のせいだと思ってるのかしら。

「非科学的ね。私もう寝るわ。」

「明日楽しみにしてろよ！」

「とてもじゃないけどできないわ。」

次の日の授業が過ぎ去るのはやけに早かった。
来て欲しくない時間ってこんなに早く来るのね．．．．。

「じゃあ灰原さん、行きましょう」

準備を終えた担任教師と自宅へ向かう。

足が重い。ランドセルが重い。

新一と暮らしたしてからこんなに帰宅が嫌な日があっただろうか。

毎日夕飯は何にしようか、とか

彼の好きな小説が発売だったから買って帰ろうかとか

大好きな彼の家に帰るのがうれしくて仕方なかったのに・・・

「・・・ただいま」「おじゃまします」

「おかえり」

ドアをあけるとそこに立っていたのは新一ではなかった

「・・・優作さん!？」

『準備』の意味がようやくわかった。

やはり新一も『保護者』の必要性をわかってくれたのだ。それで優作さんを。

「先生、リビングへどうぞ」

哀の考えは甘かった。

やはり親子だったのだ。

「私の友人の親戚の子です。訳あって預かっています。」
まではよかった。

「息子と許婚なのでね、いまはここで二人で住まわせています」
「今は小学生ですがあと4年すれば籍を入れることができる。ちょうどいい準備期間です。」

よくそんな笑顔で非常識なことが言えたものだわ・・・

救世主には成り得なかった・・・と思ったが

「しかし工藤さん・・・灰原さんはまだ子どもですし家族でもない大学生とふたりで暮らすというのは・・・」
やはり担任はそこに意見をしてくる

「何か問題でも？問題があるような想像をされてるのは先生の方ではないんですか？」

優作が笑顔をフツと消した。

「私は息子も、哀さんも信頼しています。先生もご自分の生徒さん

を信頼されてはいかがですか？年齢に見合ったお付き合いをさせています。もちろん部屋も別ですし。」

「……しゅちゅう私の部屋で寝ているけどね
と思いつつも口には出さずに哀はクスリと笑った。

第二章：救世主（後書き）

切れ味の悪い終わりになってしまいました・・・
晴れて同居公認、ということ。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1879g/>

小学生の憂鬱。

2010年10月8日16時11分発行